

た地点の1♂を加えて4♂が採集された。粘ればもっと多くの個体数を採集できると考えたが、すでに十分な個体数も得たこともあり、午後は他の採集地に移動した。

このようにして大木と内藤は、合計10個体(8♂, 2♀)を得ることができたが、そのすべてが土田の採集地点を中心としたごく狭い範囲であった。本種が採集されたときの天候は曇りか雨の寸前で、晴天時は採集されず、偶然かもしれないが♀はすべて午後で、午前は♂ばかりが得られた。

本種の正基準標本は、カンピラの滝付近で「山道上に突き出たツゲモチの枯れ枝の枝先を飛翔」している個体を得られたという(入江 1987)。それが1973年4月7日のことである。ツゲモチの枯れ枝の枝先を飛翔したのは、単なる偶然であるのか本種の生活史と関係があるのか非常に興味を持たれるところである。2011年春の琉球は季節の進行が遅れていたもので、初発見の4月7日と今回の4月14日もほぼ同じ季節に当たるとみてよいだろう。その後、本種は5月3日までは採集されているので、成虫の発生期間は半月以上に及ぶことは間違いない。鎌刈と土田はさらにその後の5月中旬に同地を再訪しているが、すでに発生期を過ぎたのか、本種を採集することはできなかった。

今回の再発見では、花上からはショウベンノキ、それ以外は木立のスピーングであるが、これらが本種の生活史解明に結びつくヒントになるかどうか、おそらく状況証拠としてあまりにも弱すぎる。ただしすべての個体が非常に近接した地点から得られたことから、今後は同地において幼虫と寄生植物の調査を行うことが可能となった。ノコギリヒメコバネの生活史解明もいよいよ現実味を帯びてきたのである。

引用文献

- 入江平吉, 1987. 南西諸島のカミキリムシ採集記. カミキリムシの魅力, 131-183. 築地書館, 東京.
- 草間慶一・高桑正敏, 1984. カミキリ亜科 Subfamily Cerambycinae. 日本鞘翅目学会(編): 日本産カミキリ大図鑑, 249-351, pls. 26-48. 講談社, 東京.
- 新里達也, 2007. カミキリ亜科. 大林延夫・新里達也(編): 日本産カミキリムシ, 252-281, 424-512. 東海大学出版会, 秦野.
- Takakuwa, M., 1981. A revisional study of Japanese longicornia. I. Genus *Epania* Pascoe (Molorchini). *Elytra, Tokyo*, 9, 1-10.
- 高桑正敏, 2008. 新種命名にまつわる余話(2) ヒゲナガコバネカミキリの仲間たち. 天牛通信, (19), 3-7.

【短報】石川県におけるツヤナガアシドロムシの初記録

ツヤナガアシドロムシ *Grouvellinus nitidus* Nomura, 1963 (図1) は、河川上流部のモスマットを生息場所とするヒメドロムシ科の水生甲虫である(緒方・中島 2006)。筆者は、石川県初記録となる本種を確認したので、ここに報告する。

2exs., 石川県珠洲市若山町白滝(若山川), 25. IV. 2010, 筆者採集・保存

本種は、若山川上流域の大きな石に生えている水中の苔類の中から得られた。実際には持ち帰った2個体の他に数個体が確認された。筆者は、奥能登の河川の上流部数地点に



図1. 石川県初記録となるツヤナガアシドロムシ.

において何度か調査を行ったが、本種が確認されたのはこの河川のみであり、他の河川ではキベリナガアシドロムシのみが確認された(渡部 2010)。

末筆ではあるが、上手雄貴博士、中島 淳博士には同定ポイントについて御教授いただいた。吉富博之博士には、原稿を御閲覧していただいた。これらの方々に対して、厚くお礼を申し上げる。

引用文献

- 緒方 健・中島 淳, 2006. 福岡県のヒメドロムシ. ホシザキグリーン財団研究報告, (9), 227-243.
- 渡部晃平, 2010. 奥能登のドロムシ・ヒメドロムシ その1. とっくりばち, (78), 38-40.

(〒717-0513 岡山県真庭市蒜山下和 663 番地 3 教員住宅 A-3 号室 真庭市津黒いきものふれあいの里 渡部晃平)